原宿殺人事件

nao

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
原宿殺人事件

【Ｎコード】
Ｎ２９５６Ｚ

【作者名】
ｎａｏ

【あらすじ】
椎奈は、姉と原宿で遊んでいた。すると、緊急ニュースが始まった。そこであらわにされたのは、サタンと名乗るものの、凶悪なメッセージ。しかしそれはほんの、ファーストステージでしかなかったた。

サタン降臨

第一話
【サタン降臨】

原宿駅前で、椎奈と姉の百合が二人でナンパ待ちをしていた。
「椎奈ぁ、あたしオナカすいちゃった～。あのお店入らない？」
「いいよお。オナカすいたあ！！行こっ。あ、でも、椎奈、パパにメールいれとかないと。ママに頼まれたんだ。」
「ふうん。パパ、また会議？てか、速くしてよォ。お店入りたい！！」
「待って、百合姉！！もうちょいで・・・よし！送信完了・・・」
ピピピピピーーーーーーーッ！！

「エ！？何」
「ふっ笛？」

突然、ビルについてるでっかいＴＶ画面から、笛の音が聞こえた。
椎奈とその姉の、百合はあわてて画面を見る。
周りもあわてているようだ。すると、画面にいきなりアナウンサーが映った。
さっきまで料理番組をやっていたはずだが、ニュース番組に変わる。
『アナウンサーの柏木です・・・。急遽日テレの番組を変更させてもらいました。ご迷惑おかけし、まことに申し訳ありません。ただ

いま入ったニュースです。十分前、警察に無名で、こんな手紙が届きました。

警察の皆さん、始めまして。わたしは、サタンです。そう呼んでください。

さて、本題に入ります。わたしは、悪魔の王です。その王が直々に人間界にやって来ました。

それも日本にです。

日本の皆さんは、なんて幸運なのでしょう。

そうだ、もっと幸運なのは、ヤグニ　コウジロウという青年です。

先ほど、わたし、サタンが殺しました。サタンに殺されるなど、すばらしい事だと思いませんか？

原宿の、「ダーム」というクラブの横のゴミ箱に捨てておきました。ごみはゴミ箱に捨てるものですから。

確認して大丈夫ですよ？罠では決してありません。わたしは醜い人間と違い、嘘をつく必要が無いので、嘘はつきません。

わたしは、人間界に警告にきたのです。人間ごときがえらそうにするな。と。

また手紙を送ります。

サタンより

警察が調べたところ、ゴミ箱に本当に青年は捨てられていました。手足が切断されていたそうです。
以上、柏木がお伝えしました。また情報がありましたら、お伝えします。』

そう言い、料理番組が再開された。一方、見ていた駅前の人々の反応は、おもしろそうだと盛り上がる若者。おびえる大人。色々だった。

椎奈と百合は、唖然としていた。

「ありえなくない？百合姉・・・」

「う、うん。やばくない？あれって、パパ達どうするんだろう。」

「警察も、びっくりしてんのかね。・・・てかさ、原宿のゴミ箱にって・・・ここから近いっしょ！？」

「こっわ～！今日家帰ろ！」

「オッケ〜」

そう言い、椎奈たちは帰った。

これが凶悪殺人鬼、サタンの降臨だった。

東京捜査本部

第二話

【東京捜査本部】

「クソッ！！サタンなんてふざけた事をしてる奴は誰だ！！」

「原宿殺人事件」東京捜査本部、刑事課係長、――池上　良次は、目の前にある机を蹴飛ばし、頭をかかえていた。

「・・・池上さん。そう、荒れないで。まだ調べて間もないじゃあないですか」

「・・・峰神。ずいぶんと落ち着いてられるモノだな。犯人の目星は着いてるんだろ――なぁっ！？」

「ま、まだですけど・・・。でも、そう怒ったって、事件は解決しませんよ・・・。まあ、確かに、目撃情報が一件も出てこないなんて、・・・俺もいらつきますけど。まー、頑張ろうじゃあないですか。」

「・・・ふんっ。暢気な奴だなあ。おい。・・・缶コーヒーでも買ってくる。ちょいと、席を外すぜ。」

「了解です～」

池上が席を外すと、峰神の隣の席の刑事が声をかけてきた。

「峰神さん、俺、あの係長苦手なんすよ。・・・荒っぽいし。もうちょい、クールに行った方が良いと思うんすよね。」

「・・・新垣。お前は気を抜きすぎだ。」

「あはっ、そっすか?。俺、これでも一応、真面目にやってるんすよ。」

その言葉を聴いて、峰神はため息をつき、こう言った。

「お前、絶対、宿題とかギリギリになってやり始めて、怒らてたろ。」

「なんで分かったんすかあ!?エスパーっ!?俺、超能力に興味ないすよ。」

すんなりと交わすのか、嫌味だと気づいて無いのか。峰神は呆れ顔で微笑んだ。

「お前なあ、何で刑事になったんだ?事件を追うため、じゃないのか?」

「え?モテるためすよ?刑事って、かっこいいですよね。てか、この事件、かっこいいと思いません?」

「はいぃ〜〜?」

「なんか、ドラマとか小説とか漫画みたいじゃあないですか！サタン、なんて。世の大人達は、頭の狂った奴、とか、中二病の親父～、とか言ってるすけど、俺的には、かっけ～お兄さんしか思い浮かばないんすよ！！」

「・・・・・・・・・・・」

「あ、仕事やべ～っす！じゃあ、現場行ってきます～。あざーしたっ！」

「おう？・・・・・」

そうして、捜査本部の日常は終わる。

何の情報も、掴めぬまま。

犯人は集団？

第三話

【犯人は集団？】

「犯人は集団じゃあないかと思っている」

「え・・・・・・」

緊急刑事課会議で、突然係長が口にした言葉。

一瞬動揺のいろが見えると、即座に係長は、説明を簡単に始める。

「・・・あんな惨いやり方、かなりの力がいるだろう？宗教団体の線でも見ていいんじゃないか？」

「まあ・・・。確かに。目撃証言が出てこないのも、脅されていたり・・・とか。」

「うむ。そういうことだ。指紋を事細かに調べて、どの宗教団体、もしくは一般人やサークルの集まりという線で捜査しよう。」

「あのお、ちょっと良いスか？」

新垣が手を上げ、峰神は止める。「おまっ・・・ろくな発言しない

んだからやめろ！！」

「ひどいっすね～！俺だって、コレでも大真面目なんすよ？」

「・・・・新垣ー・・・・下の名前、これ、なんて読む？」

「あぁ。それは、聖螺。せいらです。」

「おお、新垣聖螺・・・・。言ってみろ」

「へい。・・・っと、集団の線は無いと思います」

「？、なぜだ？」

「勘です」

「はっあ～？！」

会議場が静まり返る。係長は、息を呑み、どなり上げる。

「ふざけるな！ここは、真剣に捜査する場所だぞ？なんだ、勘などと、理由もなしに言われても困る！！」

「理由？あるっすよ？勘です」

「～～っ！！ふざけるなあっっ！！！！」

こうして会議は、次の操作方針を決め、怒鳴り声を上げ、幕を下ろした。

サタンからの挑戦状

第二話
【サタンからの挑戦状】

「もしもし。・・・ああ。ああ、わかった。・・・うん。晩飯はいらない。そう、母さんに・・・。ああ。ありがとうな。・・・・・ああ」

そうして、刑事課幹部係部長――――菅原誠二郎は電話を切る。電話は、どうやら娘のものだったようだ。ちなみに、誠二郎の娘は姉妹だ。

長女、菅原百合。頭脳は中の中。運動は下の下。容姿は中の上といったところで、多少おせっかいなところもあるが、面倒見がよく、清楚派ギャルといっかかんじで、優しく、良い奥さんになりそうなタイプだ。

次女、菅原椎奈は、一見、強めギャルといったところで、派手でハイカラなファッションに身を包み、茶髪という、いかにも今時の娘で、容姿はまた、中の上。意外にも、読書家といった一面があり、難しい文章で記された書物も、難なく読んでしまう。成績・・・。というか、良い学校に通っていて、偏差値は上の中といったところで、明るく、人気者といったかんじだ。しかし、そのイメージとは裏腹に、人の心を読むのがうまく、まだ１０代にして、人生の事を深くわかっており、決して馬鹿とは思えない。しかし、いつもの調子の良いノリと、奇抜なファッションで、あまり周りからはそうは思われていないらしい。

そして、その二人の事を知っているのは、新垣。峰神。池上、宮代といったところで、この四方は、誠二郎がよく飲みに行く部下である。そして、誠二郎が電話を切り終わり、しばらくしたころ、後ろから声が聞こえる。

「すーがわらサンっ！」

「あぁ・・・。宮代・・・・・。」

宮代桃。彼女は３１歳の若さにして、刑事課幹部係まで上り詰めてきた女。今は刑事課幹部係課長を務めている。

「菅原さん、お電話ですか？・・・あ、娘さんですね。えっとォ、椎奈ちゃんと、百合ちゃんですよね？可愛いですよねえ。あのお二人。私、最初に紹介されたとき、何かのモデルかなにかかと思っちゃいました！」

・・・モデル。というのは言いすぎだが、菅原も父親。親ばかな面もあり、実際、今の言葉はかなりうれしかったようだ。

「いやあ。そこまで可愛くはないぞお？」

「え～～っ♪」

「部長っっ！！」

後ろから響いた声。振り返ると、峰神がいた。

「あぁ・・・。峰神、どうだ。刑事課普通係は？捜査、進んでいるか？」

「大変なんです！これを・・・。」

「？」

覗き込んだ先には、小型携帯テレビ。写っているものは、ニュース番組だ。

『・・・ゴホン。え～・・・ニュースをお伝えします。一昨日、突如大きく取り上げられた、サタン事件。また、サタンと名乗る人物から、手紙が届きました。

・・・読ませて頂ます。

「こんにちは。皆さん、サタンです。ずいぶんと、大きくニュースになっているみたいですね？

・・・良い事です。

どうです！皆さん。思いませんか？わたし、サタンが正義のヒーローだと。ほら！

今の世界は狂ってますよね。思いませんか。人間は、自然を奪い

すぎた。

おっと、一つ忠告しておきますよ？

わたしが、いつ自分のことを、人間だといいました？

わたしは、サタンですよ？救世主ですよ？悪魔界よりもすさみきった人限どもを、懲らしめてやりたい。・・・・・みなさん、おもいませんか？

返事は、行動で表してください。

サタンより」

・・・・・だ、そうです。引き続き、情報があれば―』

ブチっ。

峰神は電源ボタンをきった。そして、誠二郎に、訴えかけた。

「今の番組、わかりましたか？！これから、混乱パレードですよ？日本は混乱に包まれます。」

「あ・・・ああ。混乱をさけるための指示を・・・」

「本当に怖いのはそこじゃあ無いっすよ?」

「・・・!、新垣」

会話の途中で新垣が入ってきた。新垣は表情ひとつ変えず、ただ、言葉の強弱はしっかりとつけ、こういった。

「・・・返事は行動で表して・・・・ってことは、デモ、殺人。そーっゆーことおこせっていってるんすよ。

・・・日本が、大変なことになる。・・・・とくに。ここ。原宿が・・・」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2956z/

原宿殺人事件

2011年12月29日14時45分発行